

アニー・パイルとその作品「沖縄戦記」

足立 富美

Ernie Pyle, "Last Chapter,"

Fumi Adachi

(1)

普通に上陸作戦決行の日を、米軍は「Dデー」と呼んでいた。それが、沖縄上陸作戦決行の日には「ラヴ・デー」(愛の日)と、変えられたという。パイルにはどうもその変更の理由がのみ込めなかったけれど、昭和20年4月1日は、丁度復活祭の日曜日に当たっていたので、誰かが同胞愛精神を感じたというわけであろう、と合点して書いている。そういう言葉の中にも、両側の戦いのきびしさに耐えて、ここまで戦って来た兵隊達の願いが、思いなしか吐露されていると、思われる。

パイルは部隊輸送船にのりこんで、縦列を作り、幾日も幾日も、マリアナ諸島より航海してきた。それは攻撃用輸送船であって、海兵隊員と共に乗船して来た。曳光弾のあらし、砂を吹きあげる臼砲弾の炸裂、唸りながら、目前の海中へ落ちる弾丸、そうしたさ中の上陸を誰しもが覚悟していたのに、前方からは砲火の音はカタリともしなかった。「これが真実であってくれ」と、米軍は願ったという。パイルと海兵隊員は射撃もうけず、足もぬらさずに沖縄へ上陸したのである。それは4月1日の10時頃であった。日本の土の上にあがって、最初の言葉が、「これは意外!」といった意味の発言を海兵隊の面々は、一斉に口にしてしている。即ち、これは海兵隊にとって、実に奇異千万な経験であった。信じられないのである。今までの島々の連戦から考えて、これを夢想だにしたものはいなかった。

兎に角、沖縄のような上陸の光景に接したのは、初めてであった。見渡す戦線一帯には、1人の死者も負傷者もないのである。衛生隊員は手持ちぶさたに繃帯や血漿や担架の間に腰を下して休んでいた。燃えている車体もなければ、海岸線に壊れている舟艇もない。そして、どんな侵攻作戦にも避けられない殺戮というものが、ここでは驚くほど、きれいに皆無であった。Never before had I seen an invasion beach like Okinawa. There wasn't a dead or wounded man in our whole sector of it. Medical corpsmen sitting among their sacks of bandages and plasma and stretchers, with nothing to do. There wasn't a single vehicle, nor a single boat lying wrecked on the reef or shoreline. The carnage that is almost inevitable on an invasion was wonderfully and beautifully not there.⁽¹⁾

本土に於ても、昭和20年3月頃になると、米軍の沖縄侵攻が不可避の戦局と予見されるようになった。果して米軍はどこ地点を目指すのか? それが話題の焦点となって来た。結局米軍は、沖縄本島の中央部嘉手納海岸に侵攻を開始して来た。その海岸は日本軍の作戦から考えて、意表をついた場所であったのか? 「米軍上陸地点、推定に困難を来し」⁽²⁾の文が我が方の戦記に書き込まれ

ている。その海岸一帯に上陸を敢行した敵軍は、日没までに、約20,000人の兵隊が上ったという。何故ならば地雷も魚雷も敷設されて居らぬ、場所であつたらしい。「勿論米軍はこんな状態が続くものとは思わなかった。そんな甘い考えの海兵隊員は1人も居なかった。きっと、この先辛い戦闘があるだろうということは皆の覚悟の前であつた。」⁽³⁾と、上陸後にパイルは力説しているのである、

(2)

太平洋戦域の島々を、ガダルカナル島の^{フバゼリアイ}鏑迫合勝負を契機として、日本軍より奪取して、飛石伝いの直線コースを中部太平洋に開いた軍隊が、他ならぬこの海兵隊であつた。パイルはこの海兵隊と共に沖繩へ上陸した。当時銃後でも、米海兵隊の名を聞くと、肝もひやされる思いにおびえた感じであつたが、その海兵隊についてパイルが綴つた率直な感想記録がこの書中に含まれていて、私の関心をひきつけた一章である。そこで、その実態を考察して見度い。

海兵隊は戦闘の猛者である。海岸の殺戮戦がお手のものであつた。太平洋に於ける、海兵隊のこれまでの電撃戦はどれも烈しいものであつたし、その勇戦ぶりはめざましかつたので、パイルですら、海兵隊といえば、何かしら、火星人もあるかのように怖れていた、という。しかし、実際に生活を共にしてみると、彼等にも、不安も危惧もあり、戦争を嫌っている事も人後に落ちなかつた。帰心矢の如しという心理でも同じであつた。彼等は海兵隊である事を誇りとして、他の隊へ行くのを望んでは居なかつたけれど、傲慢な所はなかつたらしい。

パイルは前線へくる前に、海兵隊の士官達から、「海兵隊スピリットをどんな風に思うか？ その由来するところや、それを永続させるものは何か？」と、いった事について質問された事があつた。——彼は海兵隊スピリットについて文章を続けている。——

海兵隊が小規模な部隊にすぎない平和の時には、派出な宣伝により、すべてが志願兵である。彼らが優越感をもつ事も理解される。しかし、戦争となれば、何十万の隊に膨張して、その部隊の要員も、大人物もいれば、小人物も居り、応召兵も居るという風で、事実上それは変化して終う。従つて、パイルには、あの欧州で戦っている歩兵の大部隊の兵隊と少しも変らないように見える。と、前おきしながらも、しかし海兵隊スピリットはちゃんと残っているのだ。何がそれを不朽にするのか？ わからないところである。兵隊達は必ずしも、よりよく訓練されているわけではないし、特別すぐれた装備があるわけなし、寧ろ他の軍隊より、補給の悪い事すら度々あつた。そしてその9割までは、兵隊になる事を進んで希望した人達ではない、彼等が海兵隊を何よりも立派な兵隊だと考えている。

彼等は太平洋戦で蒙つた部隊の怖ろしい損害を知っている。ある意味では、それを誇りにさえている。他の部隊との優劣論ではよくその死傷の数が引合に出された。そして多くの隊員は、海兵隊が沖繩で全滅するのではないかとまで想像していた。もしも硫黄島でのように、自分達が破れてしまつたら、全海兵隊師団を再建するだけの、海兵隊魂を見出す事は難しいだろうと、彼等は感じていた。こうして彼等は沖繩への進軍を、悲しくも皮肉な唄にまで作つて歌つていた。その主な文句は、「さらば海兵隊！」というのであつた。

部隊の兵隊は、パイルに会えば、沖繩侵攻があまり手やわらかすぎた事を、さも面目なげに言訳したという。血で血を洗う戦闘が見せられなかつたので、さもパイルが軽蔑していやしないかと誤解したらしいのである。パイルはその都度、こういう戦線こそ本当に有難いのだと答えている。すると彼等でさえ、申し合せたように「それは自分達も同じだ」と白状した。「いつもこんなものなら、戦争も大して苦にならない、」とは、唄の文句にもなりかねない程繰り返された返事であつたらしい。こちらの苦しい時は、敵も苦しい時であると、推量されるけれど、やはりノーマルな人間の声は聞けるのである。しかし、背水の陣となつた沖繩戦だけで、これまでの敗北を一挙に挽回する

事は、至難の中の難事であったと考えるのである。

(3)

先に、海兵隊員の精神について考察したので、それに併せて、銃後日本国民に未曾有の悲劇と損害を与えたB29爆撃隊についてふれて置くべきと考える。何故なら、パイルには太平洋戦に従軍を決意した時期から、「この超空の要塞」(Super fortress)⁽⁴⁾の名声をほしのままに活躍していた、B29爆撃隊基地を訪問したい意図があった。

銃後国民生活を経験した私にも、亦、B29については悲痛な経験を忘れることが出来ない。顧みると、1945年6月下旬、沖縄陥落以来、私は毎日8時半に家を出て、航空廠の発動機科に動員されている高女生を監督するため、大野川川添のトンネルの中に設備された廠に行くため、先ず、大野川の堤防を急ぐのである。その途中で必ず空襲警報が鳴りはじめる。そこで堤防からかけ下りて、農家の壕の中へ待避させて貰う。警報が解除になったところで、又堤防上を進んでゆくと、再び空襲警報がなり渡る。又待避して、遂に目的の廠に到着するのは午前11時頃になって終う。こんなに早く午前中にも、B29爆撃隊は編隊をくんで高度の上空に轟音をとどろかせて進攻してくる。目標があつての事と考え、待避せずに居ると、B29に同調したかのように、艦載機がどこから飛び立つのか、民家の屋根すれすれに降下してくる。そして機銃掃射の弾丸をパラパラと打ち叩くのである。機上の砲手の姿が見える迄急降下する。今も直、脳裡から消えやらぬB29の轟音と編隊が、大空に描くあのかすり模様！ それは戦争への呪文となったものである。以上は大分県下の一村の経験談であるが、既にこの年の2月4日から日本本土無差別爆撃の作戦は遂行されていた。そして大都市は次々に焦土と化しつつあった頃である。

パイルがB29爆撃隊を訪ねた3月には、その基地はマリアナ諸島にあった。隊員達が最も危惧した事と言えば、マリアナから日本本土爆撃行の往復の長い距離であった。そして下に見えるものは海ばかりである。日本帝国の上空にいる時間は、目標によって、30分から1時間そこそこで、日本軍の追跡も15分間どまりであったという。唯乗組員をおじ気づかせるのは、5—6時間も太平洋を下に見て、帰ってくる時のあの「はらはらした気持」なのである。しかも大抵は夜間であった。パイルは次のように書いている。——

撃たれてよたついている機がある。いろいろな理由から、過度の消費でガソリンの切れかかる心配もある。1つの機械がおかしくなると他のもダメになる傾向がある。そこで事故となると、海中行である。これは「脱線する」といって、基地で最もよく使われる言葉であった。太平洋上の脱線は、英国海峡のように生易しいものではなかった。ここでは殆んど致命的であった。捜査隊や救助隊は組織されているが、とてつもなく広い太平洋のまん中に、あの小っぱけなゴム製ボートを発見するのは至難の業である。

Some of the Planes were bound to be shot up, and just staggering along. There was always the danger of running out of gas, because of many forms of overconsumption. If you had one engine gone, the others were liable to quit. If anything happened, you went into the ocean, that is known as ditching. Around a B-29 base you heard the word "ditching" almost more than any other. Ditching in the Pacific wasn't like ditching in the English Channel where your chances of being picked up were awfully good. Out here it was usually fatal. A search rescue system had been set up. but it's mighty hard to find a couple of little rubber boats in a big, big Ocean.)⁽⁵⁾

こうした爆撃のたびの長い帰途では、全く運まかせの気持であった。彼等はじっと座って、観念の眼を据えていたのも無理はない。B29戦隊でも「仲間組織」という組織を用いていた。1機が落伍すると、誰かが隊列を離れて、その道づれになってやるのだ。これは彼等を元気づけるばかりでなく、いよいよ脱線した場合にその仲間が正確な位置を測定しておいて、救助隊を急派するのである。

爆撃を終えた或朝、指揮官ジェラルド・ロビンソン少佐が寢床に横たわりながら、述懐した言葉は、――

「同僚が困っている時は、こっちも実に助からない気持ですよ。発動機は2つしか動いていない。油が切れかかっていると、しきりに無電で呼びつづける。こちらの発動機は4ヶとも健在だし、油は1,000ガロンも余計にある。届けてやれるものなら、発動機1つに油の500ガロンも分けてやり度いんですが、その時の気持は全くやり切れません。」

（“You feel so damn helpless when the others get in trouble. The Air will be full of radio calls from those guys saying they’ve only got two engines or they’re running short on gas. I’ve been lucky and there I’ll be sitting with four engines and a thousand extra gallons of gas. I could spare any of them one engine five hundred gallons of gas if I could just get it to them. It makes you feel so dumn helpless.”）⁽⁶⁾

始めて見た出撃の様相から、B29爆撃隊の東京への空襲状況そして帰隊と、1日の爆撃行の行程を、彼は時間的に記録しているので、日本本土への連日の空襲はこのようにして行われた事を今更のように認識する事が出来る。それは空襲上の行程の記録としては十分であろうけれど、作戦上の秘密は全くかくされている。被爆した銃後の日本人から見ても、その目標命中率は正確なものであった。又すさまじい爆撃の炸裂状況であったと思う。やはり彼我共に最大の関心のB29爆撃隊であった事は、後世に伝えねばならぬ太平洋戦線の武器の進歩と言えるものであろう。

パイルもこの作品“The Last Chapter”の末尾に於て指摘した通り、日本国民は、最初より終戦の日まで、真相は皆目知らされず、ましてや損害、被害状況は戦況報告に加えて大本営が実施したために、今より考えれば、その数字上の喰い違いは、事実に比して過半数以上であった事が憶測される。あの3月10日の東京大空襲の夜には85,000人という凄惨な爆死者を出したのであったが、すべて戦後に知る犠牲者数なのである。

泣く子も黙ると恐れられたB29爆撃行を、その出発からここに再現して見る事にする。

間隔は実に完璧であった。間があったり、遅れたりするものはなかった。1機が完全に地面を離れたとみると、次のが滑走路を走ってやってくる。そしてどの機も離陸すると、数秒のうちに海上に去ってゆく、……ついに全機が空中に浮び上ると、編隊を組んで、さて、日本への長途の飛行へと編隊が北の空へ姿を消した。と、間もなく、1機が戻ってきた。彼等は「流産機」と呼ばれていたが、むしろ「アポーティブ」のちぢめた語である。基地ではよく使われている言葉であった。途中何かの故障が起きて、とても危険な長距離飛行にはたえられない機である。或場合にはそれが離陸の直後に起る事もあったし、いじわるく目的地へさしかかる頃に起る事もあった。毎日のようにこの流産機は時間をおいて、ふらふらと戻って来た。

（The spacing between them was perfect ; there was never a blank spot, never a delay. When we turned from seeing one safely off the ground, there would be the next one coming down the runway. Any plane taking off was out over the water within a few seconds. Pretty soon you’d see them come up into sight again. Finally they were all in the air,

formed into flights, and vanishing into sky..... No sooner had had the formations disappeared to the north on their long flight to Japan, then single plane began coming back in. These are called "aborts", which is short for "abortives". It was a much-used word around bomber base it meant the planes that had something happen to them that forbade their continuing on the long dangerous trip. Sometimes it happened immediately after take off ; sometimes it didn't happen until they were almost there. The "aborts" came staggering back all day, hours apart.)⁽⁷⁾

と、描写している。

結果はよかれ、あしかれ、夕方までに峠をこしている筈である。もう沿岸からはるかに出ていて、迫って来た日本の戦闘機も引き返した頃である。後は夜と困難と、ながい距離のひとり旅が残されているばかりである。彼等は編隊のまま爆撃し、日本本土沿岸を去るまでは、編隊をくずさないが、それから先は勝手に家路を辿るのだった。

その日、米軍は幾機かを失ったのである。1機は目標上空で撃墜され、他は行方不明になった。又あるものは損傷機を力かぎり操縦して来たが、遂に海中に脱戦した。ねばり強い1機は奇蹟的に帰還したが、——目標上空で撃たれて、編隊から脱落しつつ帰路についたが、いつも損傷機を狙う日本機に追撃され、5機に喰いさがられて、手の出しようもなかった。しかし彼らは帰ってきたのだ。——どうしてか？ それは誰にもわからない。乗組員の2人はひどく怪我をしていた。水平安定装置がうたれていた。機体は蜂の巣であった。まだ損傷機の正確な記録は続くのであった。——

彼等は唯発動機を用いるだけで、コントロールを保って来たのだ。殆んど半時間ごとに、僚機に無電を打ちつづけた。「錐揉み降下中コントロールを失う。」しかし再び恢復して1時間程とぶと、又しても錐揉みしはじめる。こうしてどうやら基地までついたが、コントロールなしに着陸せねばならなかった。彼等は巧みに降りた。然し、遂に機は滑走路のどんづまりに衝突して、火をふき、燃え上った。翼はとび、巨大な胴体は2つにわれて、地上に傾いた。しかし乗組員は皆、負傷者さえも、無事に脱出した。

(The pilot could keep control only by using the motors, Every half hour or so he would radio his fellow planes, "Am in right spiral and going out of control", But he would get control again, fly for an hour or so, and then radio once more that he was spiraling out of control. But somehow he made it home, and had to land without controls. Though he did wonderfully well, he didn't quite pull it off. The plane hit at the end of runway, and the engines came hurtling, out on fire. The wings flew off, and the great fuselage broke in two and went careening across the ground. Yet every man came out of it alive, even the wounded ones).⁽⁸⁾

行方不明機と撃墜された機について、確実な消息が判明したのは、夜もふけてからであった。しかし最後の機が着陸するやいなや、1機が夜空に北にむいて、あたふたと飛び立っていった。これは脱線の報告された地点へ明け方までに、到着しようと、いうのであった。

彼等もB29爆撃機を「超空の要塞」と呼んでいた。それは彼我共に認めた最先端の武器であった事は、否みようがない。従って、この爆撃機に遂には、原子爆弾が積込まれて、広島、長崎に投下される運命の作戦を決行させて、核戦争の呪うべき幕明けを演出して了った。それは日本民族に対する「死か、しからずんば無条件降伏か？」の宣告になったものである。広島には、ウラニウム235

型の原子爆弾を落し、現在までにその死者は20万人を越える数になっている。もう1機のB29爆撃機は長崎へプルトニウム9型の原子爆弾を落して、死者12万人と推定されている。「原爆使用の可否の判断は、判断そのものが1945年8月における米国戦争指導者の価値意識を、そのまま無修正で呑むかどうかにかかっている。」⁽⁹⁾と。鶴見俊輔氏は「戦時期日本の精神史」の中で述べている。しかし、原爆を使うという決断は、軍事上の必要だけによってなされたものでなく、政治上の必要によってなされたと言われるところに、悲劇性が倍加されるように私には考えられるのである。

亦英国の軍事史家のリデルハートは、米国の指導者の価値意識に縛られない軍事的視点から、彼の著「第2次世界大戦史」の末章に次のように書いている。「原子爆弾の使用がなかったとしても、制空権は、無条件降伏をもたらすのに、十分な圧力を発揮したであろうし、又本土上陸作戦の必要をなくしたであろうという事は、はっきりしている。米国海軍総司令官キング大將は、海上封作だけでも、石油、米、その他の必要物資の不足から、もしも米国が待つ覚悟をしていたならば、日本国民を飢えによって降伏まで追い込むことが出来たであろう、と述べた。」⁽¹⁰⁾

再び、B29爆撃隊員は、自分等の立場から逆の意見を述べている。米国の新聞の大見出しが「超空の要塞、日本を爆撃す」と報道しても、それは高い空から、1、2週間の爆撃で日本が降伏する意味にはならない。いかに激烈に間断なく攻撃しても、空爆だけで、日本を降参さすには何年もかかる。そこには幾多の困難が伴っている。先ず距離の問題がある。それから日本の悪天候が何よりの日本防卸となる。風速も1時間150哩の速度は普通の事であって、パイルの甥は、250哩の風速の中へ突入した事もあった、という。

隊員達は、マスコミがB29の空襲を誇大に扱いきる事、この爆撃で勝てる事と考える事には、懸念を示し、これを太平洋戦の最も重要な要素であると、考えるのは大袈裟すぎると言い切っている。

又彼等が空爆を終えての帰途、ラジオのスイッチを入れると、半分も帰ったか、帰りつかないのに、ワシントンで日本爆撃が公表されるのを聞いていると、面くらいもし、おかしくなったという。世界中がそれを知ったのに、彼等は未だこれから1,000哩も大洋を飛ばねば、任務は完了しないのであった。

彼等も正確に自分の爆撃能力は評価している。それでいて、士気は仲々に旺盛であり、終戦の日まで続くのであった。彼等に士気を維持させるべく、どの隊でも指揮者の方では、頭脳をしばった苦心の策を取り、実行していた風が見受けられた。実施としては、或目標を示す事、例えば一定の回数だけ、爆撃に出れば、休憩所へ戻れるというのもそれだった。闇の中を唯まっしぐらに飛んで飛んで、飛びつけ、遂に運命のとりこになるというのが彼等の宿命であったから。世界の両側の戦いはあまりにきびしく、満期になっても永久に家に帰れるという事は望めなかった。彼等は休憩所から帰ると、又新しい任務についた。休憩所に行ったところで、更に自分のベッドで横にごろりとなるだけであった。有情の人間なら、うんざりする心理もいいところであろう。パイルはこの訪問記事を次のようにしめくくっている。

彼等の慾しがっていたのは、何かしら遠いところにある変化であった。——つまり、光とか、女とか、友達附合とか、近代風のものとか、陽気さとかいったものであった。

(What they wanted was a change, something far away — lights and girls and companionship and modern thing and gaiety) ⁽¹¹⁾

(4)

しかし、この作品中において、パイル自身も指摘し、その片鱗を浮上させることに止ったもの、即ち、大きな精神上の問題が存在するのである。彼は1945年4月18日、伊江島にて戦死したために、

ジャーナリストとして、遂にその結論を出すに至らなかったもの——日本人の国民性、ひいては日本の長い歴史に培われた伝統、民族性、それは東西一致、同質のものでは決してあり得なかったのである。前編（昭和58年紀要）にて論述した通り、パイルが太平洋戦線に従軍するにあたって、第1の目標として掲げたもの、「日本兵をよく識り度い。」と懸命に研究した数々の件、現象の中から彼は日本兵とは、「辻褃の合わぬ性質」(inconsistent)、「非合理的なもの」(illogical)、そのような性格をもつ民族らしいと、表面だけを一瞥してはいるけれど、その中枢の真隨にまで迫ることは多くの時間を要し、考察されねばならない問題であったがために、他の学者の研究に待つしかなかった。然し彼が最初から日本兵とは、異質の性格、心情を持つ者として擱んで居り、それがどこから湧き出るものか、その源となったもの、つまり日本民族の伝統にまで遡り究明する時を持たなかったという事である。パイルはしばしば書いている。——「東洋人とは何か気味のわるい、サブ・ヒューマン(subhuman)⁽¹²⁾なもの。」「その心情には動かされるが、やり方が腑におちない。」⁽¹³⁾等々の感想を随所に洩しているのは、それらの証言である。

さて、ここに、第2次大戦中、イギリス将校として、アメリカ日本語学校にて日本語習得プログラムに参加、それがきっかけとなって、日本研究を決意し、ハーバード大学卒後ロンドン大学にて、「源氏物語」の文体を研究、BBCと外務省に勤務した後に来日した。コロンビア大学アイヴァン・モリス教授(Ivan Morris 1925—1976)の研究の一端を紹介しよう。来日後は日本国粹主義の研究、日本古典文学の研究、大岡昇平「野火」⁽¹⁴⁾及び、三島由起夫「金閣寺」⁽¹⁵⁾の翻訳を通じて、海外に日本文化を紹介して、大いにその分野において貢献した彼の著『高貴なる敗北』(The Nobility of Failure 1975. Holt, Rinehart Winston, N. Y.)の内容を熟読すれば、十分に認識されるところのものである。即ちモリスの研究により、東洋の一角に位置し、小島国日本民族の血の中に流れてきて、生い育ったこの異質の精神文化を理解する事が出来る。それ程欧米の伝統に対立する考え方が存在するのである。モリスは前述の作品「高貴なる敗北」の序文の中で次のように述べる。

第2次大戦以来、日本の歴史の中で演じられる「敗北」の特殊な役割につよく惹きつけられて来た。初め、日本人の感受性に「敗北」と言うものが、どのような意義をもたらしているのか理解できなかった。私にそれが解りだしたのは、1957年に三島由起夫を知った後の事である。三島が崇拜した人物とは成功者ではない。現実社会に偉業を打ち立てた人ではなかった。三島はアメリカとの戦火に散った特攻隊の若人達を讃えていた。勇氣ある敗北へ惹きつけられるという感情は、日本人の国民性の中に深く根を下している感情の発露である。日本人は古くから純粋な自己犠牲の行為、誠心の故の没落の姿に、特に気高さを認めている。⁽¹⁶⁾

沖縄侵攻決行の折「海岸エロー」の地点のみを目指して、(即ち自分に決められた局地だけを目指して)、侵攻を遂行したと、パイルは書きとめていて、例えば、どんな敵前上陸の時でも、その作戦全貌を把握する事は司令官として、至難の事であったし、全域の軍の行動を掌中に捕える事は、これ亦部隊長ですら不可能であったという、「各兵隊は自分に決められた海岸の局部をめがけて、自分独自の侵攻を行えばよろしいのであった。隣の局地は亦隣の兵隊が、彼自身の侵攻を、波動作戦をとって、同時にめいめい侵攻を決行するのである。」⁽¹⁷⁾という意味の事を述べている。従って、幸か、不幸か、パイルが参加した侵攻作戦、地上作戦において、彼の観戦した局地では、特攻機、特攻艇が突入して、体当り散華する瞬間を、彼は一度も目撃していないのである。

海軍特攻機、又陸軍が案出して沖縄戦に活躍した船舶特攻艇の突入に関して、一言の記録も彼の作品中に見出す事は出来ないのである。ましてや、彼は全体の作戦を指揮する戦隊長ではなかった。もしも、日本軍の特攻攻撃を、米軍が受け、損傷を蒙ったとしても、その場にパイルが居合せぬ限

り、その詳細は彼の耳には入らなかったのであろう。

大西滝治郎海軍中將が、フィリピンにおいて、最初の特攻部隊編成を完了したのが、昭和19年8月であった。その隊に使用された機が、所謂「桜花」⁽¹⁸⁾と言われる、体当り攻撃用の小型有人爆弾装置の機であった。「桜花」試作型は昭和19年春に完成していた。

陸軍に於ても、敵に制空権が奪われた後、昭和19年夏には、陸海軍協同の立体的戦闘が不可能となったので、海上戦闘部隊の新設が必要となり、新な船舶兵と言う兵科が設けられたのである。その中に海上特別攻撃隊が新設されるようになったが、この挺身隊に用いられた船舶がどのようなものであったか？それを軍では◎と総称していた。長さ約5米、横約1米半、中央に機関を設置して、その後に塔乗員座席がある。船尾には120Kの爆雷2ヶが積込まれる。船体はベニヤ板、機関には自動車機関を用いた。船速最底20ノット、(米本信三郎編「海上挺進第26戦隊記」より引用)

近代戦に斯る兵器の使用が効果を上げるため、艇に乗る塔乗員達は必死の訓練を受け、最悪の兵器を駆り最大の効用を發揮せねばならぬ隊員が選抜されて、江田島⁽¹⁹⁾教育隊へと集合した。それがやはり同じ昭和19年8月であった。彼等は訓練を終了し、その秋11月には鹿児島港より出帆して、沖繩守備の体制についている。

特攻隊の生みの親である大西滝治郎について、語られていることが不思議にも少な過ぎるので、説明を加えれば、彼はかつて名將山本五十六元帥に協力して、真珠湾攻撃の作戦に参加した人物であり、開戦時、フィリピン、マレイ沖海戦の基地航空部隊の参謀長として指揮を取り成功を治めていた。1944年になり、日本の敗色が濃くなってくる時、軍需省航空兵器総局長という重要な役につき、敵の無限の生産能力に比して、日本の航空機生産が、絶望的であることをつぶさに認識していたという。それで、もはや通常の戦術では到底敵に勝目はないと知っていた。それに加えて、「彼はこの特攻隊については作戦の実績に自信を抱いていたというよりも、この作戦が日本にもたらすであろう「精神的」な局面を重視していたという事もある。」⁽²⁰⁾と、モリスは書いている。それは中将の複雑な心中を洞察した言葉である。

が、これらの国難に殉じて、自ら志願して特攻攻撃に参加した若人達を、日本朝野は、「愛国心の精華」と讃えた。又「至誠の極致」と仰ぎ見たけれど、この小型攻撃機が相手とする当のアメリカ兵達は、これに「馬鹿爆弾」というあだ名をつけていた由、あだ名をつける事で、この兵器の無気味さに対する、本能的な不安感を和げようとしていたのであろう、とは、察しられるところである。更にモリスは続けている。

「一体誰が——日本古来の英雄達の伝統を知らないならば、至誠が生み出す高貴な勇気と、孤独な生命を難事に賭ける英雄の伝統に、親しく通じていないならば、いったい誰が——この愚行が現実に行われたのだという事を信じ得ようか？」⁽²¹⁾

右のように、日本精神の伝統と、国民性の特徴をあますところなく解明して、世界に日本文化の真髄を紹介したモリスにしても、この神風特攻攻撃を愚行と呼ばしめたのであった。

「愚行と言うなら、言え。」大西中将自身、その事は百も承知の上ではなかったか。彼はこの戦術を悲劇的必然性と考えていたのである。昭和19年、第1次攻撃隊編成が行われて間もない朝のことであった、と、猪口参謀長は回顧する。フィリピンの戦野で、猪口参謀と防空援体に身をかかっていた大西長官は、かつて体当りの作戦が提案された事があったが、その頃は到底容認する気にならなかったと述懐した。「長官は顔をまっすぐ前の壁に向けたままである。私は黙っていた。外ではパラパラ銃撃の音がしていた。すると長官は続けて、『こんな事をせねばならぬというのは、日本の作戦がいかにもまずいかという事を示しているんだよ』。と言った。『なあ、これはね、統率の外道だよ。』

そうぼつんと言った。」と。(22)

そういう眩きが聞かれたとしても、特筆すべき事は、特攻攻撃に志願した当の青年達は、彼等の行動の価値に確信を持っていた。勝敗そのものよりも、至誠の精神が先行するという、日本古来からの考え方から、特攻志願者が、自分達の努力は究極においては何の意味も持たぬものだと、見なしては居ない。自己を犠牲にしたところで、日本は敗北をまぬがれることはなかろう。だが、自分達の行為は何らかの意味で、祖国の精神的再生のために役立つに相違あるまいと、彼等は確信して居た事を信ずるのである。彼等の残した書簡、遺書、日記の多数を、読破して後、結論としてそのように考えるのである。

ここに詩の一節を紹介しよう。作者は京都大学文学部出身の特攻隊員の1人であった。彼の操縦する一式陸攻機は或満月の夜、特攻攻撃をかけて散っていった。終戦わずか2週間前であった。

オプティミズムをやめよ。
眼を開け、
日本人々よ
日本は必ず負ける
そして我ら日本人は
なんとしても、この国に
新たなる生命を吹きこみ
新たなる再建の道を
切りひらかなければならぬ

(林尹夫著『わがいのち月明に燃ゆ』 筑波書房、1976年)⁽²³⁾

Cease your Optimism,
Open your eyes,
People of Japan!
Japan is bound to be defeated.
It is then that we Japanese
Must infuse into this land
A new life.
A new road to restoration
Will be ours to carve.

(アイヴァン・モリス英訳)⁽²⁴⁾

ところで、眼を転じてみると、欧米の力と力の闘争や、力による支配が不協和音として、決して響かない世界がある。その世界では成功を尊び、成功者を崇拜する。西洋では自己の主義信念に命を賭けて、しかも賭けたばかりでなく、その上で勝利の栄光を勝ちえた人物が、英雄らしい英雄となっている。主義に殉じたか、生き残ったか、という生死のいかんが重要なのではない。そこで何よりも重大なのは、人の努力と犠牲の死が、現実社会にとって、価値があったか、現実社会に対して実益をもたらしたか、もたらさなかったかの1点にある。即ち英雄が英雄として評価されるのは、その生涯の社会的貢献によると思われる。

成功者が英雄視されるのは、欧米に限った現象ではない。日本でも日露戦争時のロシアのバルチック艦隊を破った東郷元帥、近世では、野口英世博士⁽²⁵⁾に湯川博士⁽²⁷⁾も、平和時代の英雄と考えられる。

しかし、ここまで考察してきても、日本の伝統の中には、これらの実社会に実益をもたらした英雄達に対立する対象を示す別の意味の英雄達が存在しているのに気附く。モリスは「日本の伝統は複雑に錯綜している。」と論じつつ、その位置づけを行っていて、所謂西洋の英雄像に対立する伝統を説明している。

考えてみれば、この世で成功を手に取りめるためには、一般に種々の術策妥協を必要とする場合がある。けれど、日本においては、成功のためにいかなる術策も用いず、他人との妥協を一切いさぎよしとしないで、ひたむきな誠実さ、(例えば楠公父子⁽²⁷⁾のように)、一途に誠心をもつ人が英雄として存在している。

彼等の生涯の初めには、その勇気と活力が推進力となって、生涯かけた大義の軌跡は急速に上昇する。けれど、彼等は敗者の宿命を負う者であるから、やがて下降の運命に従わざるを得ない。没落の憂目にさらされる。その時、敗北者は自分の命を絶つ。虜囚の恥をさけるため、亦自己の尊厳を守りぬくため、そして最終的には、自分の至誠を世に顕示してみせるための死を選ぶのである。この1人の英雄の死が、ひいては同族の士気を高揚させる結果にもなり、決死の犠牲が集団ともなれば、敵の作戦や戦術を変更させる原因を作って、沖繩全島が本土守りの防波堤となり、三ヶ月の抗戦を続け貴重な日数を稼いだ事実思い当るのである。

以上のように考えて歴史をふり返りみる時、日本人の心には高遠な目的に決起して行動したけれど、挫折した。末路哀れをさそう英雄達を特にひいき目に見る性質がある。「判官びいき」⁽²⁸⁾の風潮が源義経にまつわる文学的作品には著しい。亦「忠臣蔵」劇に対する人気の不変もそこにある。この偏向性が考慮されないと、日本人独特の価値観と感受性の評価は十分に解釈されないと考える。彼等の生涯が最後において、勝利ではなく、敗北に終わったという事実には一抹の哀感を捧げず心持である。それは人間の栄達とは、いずれにせよ空しいのだという事を教える哀感なのである。彼らを英雄のうちで最も強く共感と親密感を抱かせる英雄らしい英雄にしている哀感なのである。特攻隊員のように、目的と動機の純粋な事、そしてほかならぬその純粋さが彼らを苦難の渦中へ突入させ、悲惨な最後を遂げさせたのだという事に日本人は感動する。しかし、ここにもう一度眼を転ずる時、西洋の歴史における英雄は殆んどが勝利者である。従って、「西洋人は歴史上の敗北者に共感を抱き、そして感情移入を行うという伝統を持っていない。」⁽²⁹⁾と、モリスは言明したのである。このモリスの表現につき当たった時、私は全てが結論されたという感想を持った。

以上のように思惟してくると、パイルが日本兵について述べた片鱗を示す批判はやはり鋭く、その周辺をついた感慨であったと考えるのである。

〔註〕

- (1) Ernie Pyle, "Last Chapter", Henry Holt and Company, N. Y. 1947, P104.
- (2) 米本信三郎編「海上挺身隊第26戦隊記」27頁
- (3) Ernie Pyle, "Last Chapter". p103.
- (4) 超空の要塞 (superfortress) とは B29爆撃機につけられた称号 "Last Chapter" p28.
- (5) "Last Chapter" 632.
- (6) Ibid., p32.
- (7) Ibid., p39.
- (8) Ibid., p41.
- (9) 鶴見俊輔著「戦時期日本の精神史」190頁、岩波書店、1982年出版
- (10) 鶴見俊輔著「戦時期日本の精神史」189頁
- (11) Ernie Pyle, "Last Chapter". p5. 日本兵捕虜に対しての感じを彼はこの言葉を使用した。

- (13) “Last Chapter”, p27.
- (14) 日本の近代作家，大岡昇平の創作「野火」，昭和28年出版
大岡昇平は東京生れ。京都帝國大学仏文科卒，1944年召集されて，フィリピンに送られ，ミンドロ島の警備につく。敗戦と同時に捕虜となり米軍に収容された。復員後，「俘虜記」「レイテの雨」（1948）を発表する。
- (15) 三島由起夫：小説家及劇作家。東京大学法学科卒。大蔵省に務めたが9ヶ月で退職，以後は作家活動に専念。第2次大戦後，「仮面の告白」（1949）の成功でゆるがぬ作家的地位を固め，「潮騒」（1954）「金閣寺」（1956）の傑作を書いた。
- (16) アイヴァン・モリス著「高貴なる敗北」 齊藤和明訳，昭和56年中央公論社出版，2頁。
- (17) Ernie Pyle “Last Chapter”. p101.
- (18) 最初に特攻機に使用された小型機。
- (19) 広島県江田島幸ノ浦にて，最初に陸軍の船船部隊の訓練が行われた。
- (20) アイヴァン・モリス著「高貴なる敗北」，335頁
- (21) " 330頁
- (22) " 336頁
- (23) " 370頁
- (24) " 370頁
- (25) 野口英世：福島県生れ。若くして渡米，医学研究に専念し，スピロヘータ菌を発見す。黄熱病研究中アフリカ，アクラにて殉職す。
- (26) 湯川秀樹：物理学者，京都大学教授。中性子を発見してノーベル物理学賞を受く。
- (27) 南北朝時代の楠木正成，その子楠木正行父子の事。
- (28) 判官びいき……，源義経を短命な英雄として愛惜し同情する気持。
- (29) アイヴァン・モリス著「高貴なる敗北」，3頁

〔参考文献〕

- (1) Ernie Pyle, “Last Chapter”, Henry Holt and Company, N. Y. (1946)
- (2) 瀧口修造訳「最後の章」，青磁社，東京（1950）
- (3) Henry Miller, “Last Story of Ernie Pyle”, The Viking Press, X. Y. (1950)
- (5) 鶴見俊輔「戦時期日本の精神史」岩波書店（1982）
- (6) 池田哲郎「日本英学史風土記」篠崎書林（1981）
- (7) Ivan Morris, “The Nobility of Failure” Holt Rinehart and Winstom, New York through George Borchardt, Inc. N. Y.
- (8) 齊藤和明訳「高貴なる敗北」中央公論社（1981）